

村野次郎創刊

香蘭



2022年(令和4年)7月号

第99卷

第7号

通卷1099号

1913年(大正4年)7月1日発行(毎月1日発行)

香蘭

第九十九卷第七号



香 蘭

2022年(令和4年)7月号
第99巻 第7号 通巻1099号

目 次

村野次郎作品 私の愛誦歌(83) 香 山 静 子 表二
作 品 一 2

二 21
三 28

推薦香蘭集 35

香 蘭 集 36

作品一特選(五月号) 相川・青山・伊藤(美)・伊藤(康)・岩田・
小林・鈴木(桂)・長野・中村(か) 14

作品二、三特選(五月号) 江口・庄司・中村(陽)・松沢・柳沼・
安田・河野・篠水・馬場 16

村野次郎への旅(147) 千々和 久 幸 18

一頁公論(14) 明日香への旅 朝 香 ふさ枝 20

七 首 抄(五月号) 村上・小原・馬場・市川 27

私の読む現代短歌(14) ミステリアスな安立スハル 田 中 あさひ 40

エッセイ・自由研究 敗者の文学―後鳥羽院― 香 山 静 子 42

焦 点(五月号) 心惹かれる初句、上句 市 川 義 和 44

作 品 評(五月号) 作品一 坂 井 京 子 46

作品二 牧 野 道 子 48

作品三 川 原 優 子 50

香蘭集 篠 水 路 子 52

耳言あれこれ(8) 田 中 あさひ 54

緑 地 帯 福本・近藤(純)・西村 55

明宝研究会第一二七会四月例会「香蘭」誌の編集 市 川 義 和 58

他誌拝見(121) 波 辺 礼 比 子 66

他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向 74

歌会及び会合・会員消息・他 78

編集後記・新宿日記 表三

表紙絵 中村 陽子「浮遊」 目次・緑地帯カット 和田 和雄

村野次郎作品 私の愛謡歌 (83)

あてどなきあくがれかなしあはあはと

今日も消けのこる夕明ゆふあかり空

『栲風集』

この歌は村野次郎の『栲風集』の中の一詩である。さて、私たちは概して明確な形の憧れを持つているとも限らない。しかし、心に浪漫を抱いている者は常に言い知れぬ「あくがれ」を抱いているのではなからうか。恐らく村野次郎もその一人と言えよう。次郎は空に消え残る夕明りを見て、言い知れぬ「あくがれ」を抱いたのであろう。なお、作品の「あ音」の重複が作品に柔らかなさを加える役目を果たし、内容をより引き立てる結果となったようだ。私たちはこの作品から一首の歌の中で「音」と言うものが如何に大切な役目を果たしているかを汲み取るべきである。なお「夕明かり空」を補句に捉えたことよって読者の目に夕明り空の美しさを強く印象付ける役目を果たしているとも見ることが出来る。

次郎作品中の、忘れ得ぬ一首である。

〔短歌新聞社文庫『栲風集』106頁、村野次郎三百首〕24頁に掲載〕

四 選 者 の 作 品

片鶯ばかりが 平塚 千々和 久幸

月夜の晩ばかりじゃないぜと言いたるは三日月の彼 酔つてはおらぬ
用ずみの案件が頭もたげくる沈めた筈の坊主頭が

榮業が片寄つてます そうでしよう靴の外鶯ばかりが減つて
恋人は田中朝代と直いし父をほのほの思い出でつゝも

「天国に結ぶ恋」などもありしかな通かとなればのとけき昭和
もうさまはないよ全身のあちこちがいつかこんなな壊れちまつて

人見れば少し運るる時計して昔段の顔で余いに行きたる
穂の芽の天麩羅を買い晩酌を始む妻あらぬ春のまた来て

欲 望 鎌倉 香山 静子

バラリンピツクの金貨を得て抱き合へるウクライナ選手の哀しき種
戦ひは常にとこかで起きてゐるテレビを覗つつ今宵も憂ふ

罪のなき人らが山野を逃げ惑ふ戦に泣けるは常に弱者
平和とふ世に甘えつつ温々とわれら生きゆく日本の今を

幼き日防空壕に潜みつつ過ぎゆく敵機の音聞きみたり
戦争とふ言葉ひびかぬ今の世を危ぶみながら過すこの日々

人間の欲望とは限りなし平和なる世の来るはいつの日
人と人憎み合ふ世の終焉を切に願へり戦知る身は

疑似家族 我孫子 丸山 三枝子

にんげんを認める父がすがすがと夢に来ていたさくら降る庭
疑似家族のドラマ見終えてペランダに桜はなびら揚き寄せている
花終えて一息ついていていような桜の幹を剛くたりゆく

やわらかな季節はすぐに過ぎゆけど五月の櫻のみどりやわらか
上野駅ホームに立てる人あまた おぼけもいるか(ああ上野駅)
街かどに佇ちつくす自動販売機 運ばるるなき缶もあらんか
白壁にさす山吹の影ゆれて抒情的なる夕ぐれは来ぬ
欲しいもの何もなくなり時間だけ流れてゆくがわたしは死なない

泥の力 東京 桜井 京子

桜ばな咲きつつ散つて戦争のニュースは途切れ途切れに届く
爆撃の映像の中に映りこむ一瞬ありて黒き鳥たち

「泥濘」とニュースは告げをり侵攻のロシアを阻む泥の力を
ロシアにてきそひ買はるる砂糖とぞ冷たきミルクに沈めむとせり
オミクロン株陽性と告げられ春うらたたくさん菓をもらつて帰る
またすこし熱があがつてきたらしい脳の奥が火照りはじめつ
死のきはに雪がたべたいといひたるは俊成卿なりきその心はも
戦争で地震でコロナで死ぬ人よわたしは窓辺に灯りをとちす

作品一特選



(五月号作品から)

丸山 三枝子 選

スマホの操作

川越 相川 公子

生垣の葉むらを揺らす鳥のみて庭の寒気のひとときゆるむ
子に諭すやうに濃やかに長男がわれに教へるスマホの操作
絵の教師してゐし姪の抽象画 職退きしより色の明るむ

老いわれに立春の語はあたたかき旅の夜に見しともしびに似て
新調のなじみ良きこのウィッグに肩を押されて歌会にゆく
軍事侵攻告げるテロップ流しつっテレビは映す国会中継
・一首目と四百日の豊かな運想力が、抒情性に富む世界を創出した。

蜘蛛の糸

米子 青山 侑市

朝まだき部屋にはのはの雪明りしばしを床に留まりて見つ
今日の仕事あらまし終へて湯に没る羊焼酎の酔ひはのはの

日の差せば雪の煙から抱へくるキャベツ一つに大根二本
寝れ船をひつくり返したその下に猫の親子の住処あるらし
風に揺れ空にさ迷ふ蜘蛛の糸わが精神のごとく見てゐる
鏡は言ひき「冬の間に歳をとる」吹雪で携ふ竹藪を見つつ
・三首目は晴耕雨読の日々の寂寥の喜び、キャベツと二本の大根が顔つ。

きみのねむり

川崎 伊藤 美恵子

左手に野菜右手に肉魚 杖を持つ手を忘れておりぬ

夫のねむりわれのねむりを見届けて猫は行くらし自分の布団へ
ぼろぼろのきみが晩年見届くさんころつくして見届くさんと思う
一日一首詠むなんてこと出来ないなあ 光るドアノブ見つめておりぬ
懐かしく義母を顧ませて老いし夫同じこと言う同じことする
八十歳を過ぎたるわれの薪割りを道ゆく人が見ながら通る
・三首目の、胸を突かれる現実にしみじみと心打たれつつ鑑賞した。

人間ドック

東京 伊藤 康子

今ならば空いていますと勧められ人間ドックに申し込まざる
念の爲とて胃カメラ前にPCR検査されおり聞いてないけど
ふらふらと点滴スタンド押していく床のでこぼこにつつかえながら
続きたる検査に疲れMRIでついに寝落ちしあきれられたり
いよかんとポンカンテコポン腕に盛りカンポンポンと春を待ってる
三回目接種が済んだら会いましょう五つ並んだ板の絵文字

・五百日の言葉遊びも含め、オリカチユアともおぼけとも読めて面白い。

終添へむ

安来 岩田 明 美

姑の顔へし言葉をつぶやきぬ節分の形代に身を撫づるとき
形代にふたりの孫の衣撫でコロナ橋私はむ節分の夜

節分の二尾の鯛の塩焼きに終添へむ真白き皿に

耕すは難しと姑の植えたりし五本の梅の三本を伐る

「林檎の香のごとく降れ」とぞ詠みませる雪降る今朝のリングは酸くて
山裾にさきがけて咲く紅梅にマスク外さう口角あげて

・五百日は白秋の歌のパロディし、後朝の歌を軽やかに転換して読ませる。

貯古輪糖

長野 小林 唯 見

娘来てバレンタインのチョコ呉れる 日本語ならぬ横文字の箱

嫁と孫別々に来てチョコ呉れる金銀青の包みまらまち

小学の遠足の時は銀紙で包んだ小さきチョコがたのしみ

村まつり五銭買ひて板チョコを買ひたる思ひ出忘れずになり

日本では明治の始め「貯古輪糖」の名で売られたと字引にありぬ

・一般の辞書には載っていない「貯古輪糖」の言葉の発見に驚かれた。

街 角

西宮 鈴木 桂 子

くり返しくり返し見るふるさとに雪降る動画兄の送り来
すぐ帰るつもりで来たる関西にいつのまにやら過ぎし十年
帰るべき街の灯とほし水音を聞きつつわたる小さき橋を

淹れたてをブラックで飲む街角の白い明るい朝のマックに
ふはふはと夜の灯りに舞ふ雪に一瞬街は美しくなる

花やには花がいつばいわれのため赤きグリアを冬の街に買ふ
・三百日では、せわしない一日の仕事から解放された安堵感が感じられる。

初 雪

横浜 長野 道 子

寒の入り北風吹きてわが頬を心地よきまで打ちてゆきたり
血圧の乱高下する歳末をこれこそ私と数値を記す

目の縁に痒みのありて赤らみぬ泣いたようにも火照りのようにも
われの弾く堅琴の音の届きしか父母のいる雪雲の上に

パッハなら許してくれるミス多もたましたるわが弾くアリアを
幸せと不幸せとは地続きと思わせ初雪光りてまぶし

・五百日は音楽に親しむ作者ならではの題、パッハへの親愛と憧憬が滲む。

冬 の 陽

福岡 中村 かよ子

輝きを増しては消える春の雪家族のかたちがゆっくり変わる
寂しいかと言われてみればそうとしか言えないけれどそれは違う

両腕を上げれば胸がポキと鳴るたわんだ思いの跳ね上がる音

自分からわざわざ年を取りに行くこととき夫のジャンパー隠す

命には関わらぬからと医者言う目眩が私を根こそぎ渡う

春はもう来ているのだろうか病院の外もやっぱり目眩の世界
・三百日の胸の音は、たわんだ思いを描きさせる明確とも読めて巧みだ。

作品二、三特選



(五月号作品から)

千々和 久幸 選

(作品二)

3LDK

柏 江口 耕代

東の間を共に暮らししマンションの13階の3LDK

十三階の窓を開ければアルプスの山脈見えて夫はおらず

おおいぬのふくりがひとつ花つけて淋しい春がここに来て

雪の日は部屋に籠もりてナベサダのサククス聞いて君を想うよ

うな重をうまいと言いて食みてよりひと月後に姿を消せり

庭先の紅き椿のふくらみぬ生き来し日々の時間重ねて

・いつもと変わらぬ春なのに、夫の居ないことが不思議でならない。

春の訪れ

横浜 庄司 健造

重ねたる船ひとつを引き摺りて今年も春の訪れを待つ

電柱の影の伸びゆく如月の路上に春の光しとどきぬ

鶴見川の中州に川鶴は羽根ひろげ如月の風いまだきびしき

散歩する行く人来るひと立ち止まり目隠して見る桜のつぼみ

きさらぎのひかり日毎に温もりて道端に咲く水仙の花

重ねても酒で秀歌は生まれぬ 今日の花雲ゆつくりとゆく

・対象と正対してぶれない氷み口が、作歌力の向上を約束している。

スニーカー

東京 中村 陽子

昨夜より積もりし雪が踏まれおり北京五輪の光と闇よ

新調の白いスニーカーはいてゆく少しだけ若くなったようなり

福寿草ことしも咲いて紫のビオラの中の黄色い小花

冬枯れのイチョウの枝は体内をめぐる毛細血管に似る

木枯らしの暗分なりや欄干にピンクのリボンひらめいている

この日ごろ憂鬱なわたし閉めるたび引き戸が嫌な音を立ており

・明るい色調に包まれた一連が、作者の心躍りを感しさせる。

ビーナッツ

さいたま 松沢 みどり

丸々としてかわいね口開けてはいとおぼる皮つきビーナッツ

かみしめるほどにうまみが広がってとりあえず今はとても幸せ

皮つきのビーナッツ皮ごとかみしめて この苦味でまたビールが進む

ビーナッツビーナッツ煎餅ビーナッツクリームビーナッツは各所で頑張っている

ビーナッツは二日酔い防止になるらしいと聞いて安心してもう一杯

ビーナッツ入りのおかきのビーナッツ探って食べておかき残り

・何をどう歌っても勢いがあり動きがあって、愉しませてくれる。

息子 足利 柳沼 きよ子

野良猫の掬ねたる様なその目つき出来れば石でも蹴りたい風情
ジッパ―が七つ付いてる大ぶりのショルダーバッグ手に入れました
時折は「おかん乗けたか」と言う息子 まだ死なれては困るとも言う
とりわけて何に倦んだと言うでなしこの頃呀えぬ私の気分
短歌とは解らないから有り難いお経と同じ効果であるか
助手席を降りた途端に大殿筋の真ん中辺がピリリ引き曇る
・「短歌お経」説の善教自在さ、響めつらした短歌より数倍面白い。

真冬のスイカ 行田 安田 恵子

夜道ゆく夫と娘の声疾風にさらわれて飛ぶちりちりに飛ぶ
季節感うすれて久しフルーツパーラーに真冬のスイカ
舌上に言いたき言葉うずうずとマスクの下で発酵はじむ
いつの日か焼かれて残るわが膝の人工関節チタンのふたつ
背を開かれ腸をぬかれし青アジは二月の風に干物にさるる
群すずめ飛び去れるあと結草を鳴らせてゆきし如月の風
・知的な泳み口が持ち味の作者、多く泳み情の豊かさをも探り出せること。

（作品三）

をちさんだつて 鎌倉 河野 慎二

意識してセサミン・ビタミン・コラーゲンをちさんだつて綺麗になりたい
幸せのかたちはきつと四肢床に投げて眠れる日だまりの猫

こんこんと降り積もりゆく雪は自分が音を呑みゆく夜のくだちに
忘れたきことのみ沖にたゆたひて去る棧橋の春の靴音

旧版名の古書で読みたるヘーゲルのとんとわからぬ俺様でよし
・「難しいことを美しく」が基本だが「易しいことを深く」もお忘れなく。

胸を張れ 川崎 藤永 路子

海の中でこたけみどりの真水だねいつまで真水でいようかここで
それはたぶん残留思念だときみは言う隙子の棧に気配が霞む
雨だれが聞こえてきたりまたしてもあなたと同じ轍を踏めば
銀の靴を鳴らして今日は胸を張れ深呼吸せよドロシーのように
話そうと思う言葉を見失いのべりと脳はとろけてゆけり

・新たな世界への挑戦意欲は買うが、今は苦しげな表情の方が目立つ。

終着駅 松江 馬場 美信

いつせいに飛び立つマガン振り向かず ただあかあかと二月の夕陽
三回目ワクチン接種 待合に老人たちの寂寥光ちて
やる気だけはあるのだけれどどうみても体力知力語彙力欠如
終着の駅の分かれぬままの旅 鈍行で行く残りの未来
さしあたり次の駅では温かい珈琲飲もう停車時間に

・新り切りが良すぎて、音が早く出過ぎる。カメを意識すること。

大正期の「香蘭」（八）

千々和久幸

「香蘭」第四巻第四號は大正十五年（1926年）四月一日に發行された。全六十三頁、巻頭に北原白秋の「一家言」を掲げ、その後編集は例月通り短歌、エッセイ、前月歌壇月評、六號雜記など交わりは無い。発行人田中次郎、發行所香蘭社も同様である。

北原白秋の「一家言」は「長歌と反歌」、「その奥のもの」、「未聯」、「連作について（一）」、「（四）」、「集つること」の十項目に亘っているが、ここでは「連作について」から本稿に関係のある箇所を引く。

連作について（一）

連作の短歌も各その一首は獨立した一首であらねばなるまい。詩の一篇と同じにはである。だから、連作體の短歌の一首一首は詩の一聯一聯と同じであつてはなるまい。また連作に於ける短歌の相互關係に於ても、詩の各聯に於けることと緊密と均齊とは必ずしも求めず

ともよい筈である。各首の連關状態は自由自在であつて初めて連作の理由が生じ、妙味も伴ふことと思はれる。また連作體の短歌は機關銃の弾丸のごとく、カタクくくと規律的に飛び出すものではない。

連作について（二）

私の短歌以外の詩作に於ても、個に獨立はして、而もまた同時形を以て成した連作は多い。（中略）定形律の詩の多くは、各聯が一定の形式を以て止しき相互の均衡を保つてゐる。短歌の連作にもそれがあつてもいいやうに思はれ乍ら、誠にいい發達を見ず、却つて一首一首を稀薄ならしめるについては或は何らかの理由があらう。（後略）

連作について（三）

連作の規模の大小は個の力量若くは熱情の如何に依つて定まる。一首一首を緊密ならしめるには、普通には多量生産は憚むべきであらう。この實力の如何を自ら測らずして量

のみ求める時には却つて自らを深い陥穽に陥れて了ふであらう。如何にまた多力者と雖も、百の連作を百ともに玉の如く光輝あらしめる譯にゆくものではない。ほとんどは十の連作に光るものは一二である。八九は寧ろ棄つべきだとは思ふが、さて自らの歌となるとなかなか未練が出て、恥入つて了ふ。

連作について（四）

歌は生活の外的記録であつていいことはない。内生活の律動こそ歌ふべきである。それであるから連作に於ても「はしがき」で済むことはさらりと済ませて置いたが、「はしがき」で足るものを歌にする要はない。旅行の連作の如き、何から何までを順序立てて、出發より歸宅までを歌にしなければ取まらぬくらゐならば、寧ろ散文で記録して置いたがい。旅行の連作は必ずしも旅行の體形を成さずともい、一旅情の表現こそ重大である。

白秋の連作についての基本は、あくまでも一首一首の獨立である。相乗効果という発想はない。また連作を一編のドラマと捉えることもしない。わたしのような續んだ遊びごこ

ろは無く、連作であろうとなかろうと詩作の基本に厳しく、またストイックでさえある。おおいに考えさせられた。

実作上は短歌と詩を比較して論じた(一) (二)よりも、短歌を中心にみた(三)(四)の方が参考にならうか。ことに(三)の連作の成果(収獲)を論じた「八九は家も棄つべき」は白秋にしてこの敢しき、筆々眼情(注)胸中に銘記して忘れず守ることすべきであらう。

作品欄では巻頭の白秋が「象の鼻」八首、最後尾の次郎は「彼岸参り」六首の出版。

彼岸参り

村野 次郎

久しぶりにて母下多摩村の父の墓に参る。

①父の墓に水たむくべく来る子や桑畑路に葉をさげて

②春さりて野の面を通し風吹けり桑畑の土ひた乾きつつ

③夕づきて陽にまばらなる桑畑をすきてし見ゆるおくつきとこら

④春浅く土筆はいまだ萌えざればわれはかな

しむこの高土を

⑤まほしみて高くあふげと揚雲雀空の深所になきみるらしも

⑥道とほる車馬のはこりによこれたる扇骨木芽ふきて晴れし日つつく

①の歌、白秋の連作論(「一家言」)に従えば「はしがき」ということになるが、わたしは「序歌」と呼び慣わしてきた。白秋は「はしがき」で済むことはさりと済ませて置いたが、連作について(四)「はしがき」で足るものを歌にする要はない。だが、わたしは読者が一連を所載し、作品を読むウオームアップの役割を期待している。

①の歌は詞書の方もありますが、併せて読めばまさしく序歌の任に込えていると思う。北多摩あたりの田園風景や、作者の姿が親しく浮かび上がってくる。

②の歌、久しぶりの墓参は、春分の日前後であったらうか。父の墓は村野家代々の桑畑の中にあつたというのも、往時の事情をよく伝えている。今日のような何々墓園ではない。当日の風の強さと土の乾きが、はからずも記憶となった墓参であった。

③の歌、連作を時系列で追つた一篇のドラマと読めば、一、二句から墓参を終えていまい一度振り返つた場面を想像出来ようが、あるいは一、二句は墓参のため桑畑を訪れた時であつたのかも知れない。

桑畑は村野家の土地には違ひあるまいが、先生の家で茶を飼つていたという話は聞いたことがない。あるいは貸地だったものか。

④の歌、春といえは、まず周辺の土筆がそれを知らせてくれたものだ。先生の記憶は「萌えざる」土筆に及んでいる。故郷はこの「直土」の実感と共にあつたのだ。子供の頃、この辺りで土筆を見つけては摘んで遊んだのだらう。それも土筆の生える場所は毎年同じところだから、尚更愛着が深い。

⑤の歌、「雲雀」もまた春の景物の一つ。桑畑には雲雀の巣もあつたのだ。私の記憶でも雲雀の声は空の彼方から聞こえた。先生はもう少年に戻っている。

⑥の歌、視野は墓地を離れて桑畑の周辺の道路に転じられている。①の序歌に対応させたものと読んだ。一首独立した歌と読めば、一生活者のある日の感情、ということにならうか。四句の「扇骨木」はカナメモチと読む。